2026 年
（令和 8 年）
10 月 8 日

むつび

石井十次の会　会報

350 号

第 26 回石井十次セミナーでの講義を終えて

淑徳大学長谷川仏教文化研究所
菊池義昭

8 月 19 日に兎澤聖先生と宮崎空港に着き、今年も石井十次資料館で資料調査などが出来ることを感謝しつつ、高鍋駅で下車し夕方ホテル四季亭に落ち着き、夜は石川正樹先生などと『岡山孤児院日誌』の解読の打合せをした。

翌 20 日は、9 時半ごろ石井記念友愛社を訪問し、児嶋草次郎先生と懇談し、石井十次資料館での資料調査と第 26 回石井十次セミナー（以下石井十次セミナー）での講義の準備を 22 日まで実施し、23 日「大原孫三郎と石井十次院長の出会いから日露戦争直後までの交流を中心に」というテーマで講義をさせて頂いた。

講義の直前に、ふと思い出したことは、30 歳の時に石井記念友愛社を訪問して児嶋虓一郎先生にお会いし、現在 76 歳になるので 46 年間の歳月が流れ、その後 1993 年頃からはほぼ毎年 8 月に石井十次資料館で資料調査を行い、石井記念友愛社の職員の皆様や地域の皆様と交流し、今日があることを実感した。

過ぎてみれば早いように感じたが、そこには 46 年間の歳月が内包され、幾多の出会いと小さなドラマがあり、その中で石井十次院長が創立した岡山孤児院の実践の全体像を探求してきたことが、自分史であったと自覚出来た。

そして、石井十次院長の岡山孤児院の実践の全体像を探求する中で、石井十次院長と大原孫三郎の出会いとその後の展開は、岡山孤児院の実践の命運を左右する歴史的な出会いとなり、同院のその後の展開を担保すると同時に、大原のその後の実業家などとしての人生を決定付ける歴史的役割があったと認識するようになった。

特に、岡山孤児院は、東北三県凶作地より 825 人の貧孤児を収容して 1,200 人規模の施設に発展し、その後、半数以上の東北児は帰郷したが同院は財政難に陥り、大原孫三郎の支援などを受けつつ石井十次院長は残った院児と共に茶臼原

に移住し、農業による自給自足と年長院児の独立自活を目指した。

しかし、石井十次院長は道半ばの 48 歳で永眠し、岡山孤児院は存亡の危機に陥ることになるが、大原孫三郎が理事（院長）に就任しその危機を脱し、1926 年まで継続した。

つまり、石井十次院長の後継者として大原孫三郎が理事（院長）に就任したため岡山孤児院は崩壊せずに軟着陸できたと考える。

また、石井十次院長の後を受け継ぐ後継者の問題は、石井十次院長自身も生前から強く意識し模索してきたが思うように行かなかった。理想的には、岡山孤児院の現状と到達点を熟知した職員の中から出てくることが望ましいと考えていたようだが、その引継ぎをする前に永眠してしまった。

そして、石井十次院長の後継者は、①岡山孤児院の現状と到達点を熟知し、②職員からも、地域社会からもその見識や人望が認められ、③さらに後継者自身も孤児教育への深い経験的知見と高い信念を持つ人物でないと維持継続ができないと筆者は考えた。その意味で大原孫三郎は、先の３つの条件を満たす人物であった。言うまでもないが、岡山孤児院の現状と到達点を熟知せず、かつ職員や地域社会からその見識や人望が認められない、未経験の人物が就任したら、たとえ地位や肩書がある人物でも近いうちに空中分解していたと考える。

さらに、歴史の結果からみれば、石井十次院長の後継者が、大原孫三郎であったことは歴史的な幸運（運命的な巡り合わせ）との比喩になろうか。

それにしても、8 月下旬の石井十次セミナーは、地球温暖化を再確認する体験であった。8 月 19 日から高温多湿の気候が朝まで続き、熟睡ができず、23 日の石井十次セミナーに照準を合わせて体力を温存し（実は 7 月中旬から)、やっと間に合った。高齢になると体力などの面で個人差が大きく、それを認識した行動が必要と理解した。

ただし、翌日（8 月 24 日）ある方から電話を頂き、東北三県凶作地の貧孤児へのインタビューの話を聞き、涙が止まらなかったとの評価を頂いた。この評価を聞き、一人の参加者に感銘が与えられたようで、これで私の役割が果たせたと実感できた。心より感謝申し上げます。

さらに、今回の講義では、兎澤聖先生に協力を頂き、私の岡山孤児院史研究を引き継ぐ後継者として紹介でき、石井十次資料館での資料調査も慣れてきたとのことで、今後とも関係者の皆様のご協力をお願いしたいと希望する。

2026 年 8 月 28 日記

「石井十次 夢つむぐ人」CD 配付のお知らせ

高鍋町では、町内４校の教壇の上に洋画家鱸（すずき）利彦が描いた石井十次の肖像画のコピーが飾ってあります。石井十次について小学校から中学校まで学びます。

県内の小学校でも４年生で郷土の偉人の一人として学んでいます。「ひむかかるた」では「あ」が「愛にあふれた石井十次は孤児の父」として子どもたちは知っています。

ところが、高鍋町長 黒木敏之氏のお話によると、「過日、宮崎市内の中高生に講演したとき『石井十次を知っている人はいますか？』と問いましたら、誰も手を挙げません。残念なことに誰も石井十次のことを知らなかったのです。」

そこで、何とかもっと石井十次のことを周知してもらいたいとの思いから前出の黒木敏之氏が新に「石井十次 夢つむぐ人」を作詞作曲されました。

現在歌われている石井十次の歌「村の祭りに縄の帯・・♪」の曲は 60 年以上前の曲です。勿論この歌も素晴らしく歌い継いでいきたいのですが、これから様々な取り組みを拡げていくために、今の新しい歌が必要なのだと話されました。

昨年の第 25 回石井十次セミナーでは「石井十次 夢つむぐ人」の中の「為せよ屈するなかれ」が初披露され新聞にも載りました。今年の第 26 回石井十次セミナーでも「藩校ブラスアカデミー」の演奏で平成音楽大学教授 馬込勇氏の指導のもと、山元瞳先生が歌唱されました。昨年よりも高鍋町内の中高生の部員数が増え、演奏に深みを感じました。素晴らしい演奏と歌唱力に皆で盛大な拍手を送りました。

今年の石井十次セミナーでは、「石井十次 夢つむぐ人」の CD が配付されました。



CD 表紙は石井十次肖像画（画家・鱸（すずき）利彦）

歌・コーラス　山元 瞳とflat＋（フラットプラス）

1. 夢つむぐ人　2. 為せよ屈するなかれ　3. 炎の誓い　の３曲です。

CD をお求めの方は、石井十次顕彰会までご連絡ください。

石井十次顕彰会で無料配付しています。

事務局は高鍋町たかしんホール２階・℡0983－23－4312

編集委員　徳地順子

石井十次少年団、その後の活動

石井十次少年団が昨年 10 月 30 日に結成されました。現在の団員は 14 名（男子 5、女子 9）で、年齢層は 6 歳から 11 歳まで。

今年 5 月から活動が始まりました。まずは石井十次が少年時代を過ごした郷土の自然や歴史に触れ、その中から何かを学ぶことを目指します。子どもたちにとって新しい知識にもなり、教養を高めることにもなります。

5 月には高鍋湿原を見学して高鍋の自然に触れました。6 月には歴史資料館で歴史を学び、幼い十次が 2 年間通った明倫堂があった高鍋城址を散策しました。



今日は高鍋城址を散策し歴史を学びました

そんな学習活動を通じて、子どもたちは仲間を知り、お互いに仲良くなりました。でもなかにはまだ他人とうちとけられない子どももいて、さらなる仲間づくりやチームワークの醸成は続きます。

8 月から 9 月にかけてはプロの指導者を招いて劇に慣れる練習をします。10 月からは、いよいよ劇の稽古が始まります。

週 1 回程度の稽古を重ねて、来年 1 月に開催される「石井十次顕彰のつどい」での上演を目指します。間もなく子どもたちの元気一杯の十次劇が見られることでしょう。

団員募集は今も続いています。十次の会会員の子どもさんやお孫さんの加入をお待ちしています。

編集委員　石川正樹

《 お し ら せ 》

★新会員のご紹介（敬称略）

【宮崎市】松本 祐子　【日向市】小山 幸子　【三股町】本山 成美

★ご寄付をいただきました（敬称略）

【日向市】三股 晶子　【西都市】福島 律子　河野 由美子　【川南町】樽見 文與

【都城市】石井十次の会都城支部

＊ここまでの掲載者は編集等の都合により 9 月 20 日までのものとしています。

☆11 月の通信発送作業は 11 日(水)12 日（木）両日ともに 9：00 からです。

この会報は、宮崎県を中心に全国 1700 余の個人・団体に毎月送付しています。

〒 884-0102 宮崎県児湯郡木城町大字椎木 644-1
社会福祉法人　石井記念友愛社後援会
石井十次の会
TEL/FAX　0983-32-4612
ﾒｰﾙ　yuuaisya-jyuujinokai@kijo.jp

編集後記

●第 26 回石井十次セミナーで講義された菊池義昭先生に巻頭言を執筆いただきました。感謝申し上げます。
46 年にわたる石井十次研究の成果をわかりやすく講義いただき、強い感銘を受けました。今後とも、ご健勝のうちに研究を続けられることを切望いたします。

編集委員　石川正樹